

論文の和文要旨

論文題目 ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所

氏 名 岩崎(矢野)久美子

1. ハンナ・アーレントにとって、「政治的思考」から得られるものは「定義でも理論でも」なかった。それはむしろ、「遅々とした足取りの発見であり、出来事がほんの束の間だけ浮かび上がらせる領域の測量地図」であった。本学位申請論文『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』の目的は、いわば彼女の思考によって描かれたその「測量地図」を再発見することにある。具体的には、アーレントと同時代の知識人群像との交流を下絵とし、またその歴史＝物語の襞を洗い出すことによって、彼女の思考の核心を再解釈する試みである。このような視座は、「人と思想」といったような一般的な着想から発したことはない。むしろ、アーレントが政治思想史のなかで占めている特異性や、彼女がもたらした「活動」「複数性」「始まり」「公的空間」「世界への結びつき」といった諸概念の新奇性を、その生成の現場から理解するための方法的な模索を前提にしている。アーレントは、「測量地図」を描く自分の「新しい」手法を、「古風な物語り」とも呼んだ。そうした彼女の構想の前では、通常の理論的な裁断やパラフレーズは困難に直面することになりがちである。本論はそうした方法的難問の自覚に基づいている。

2. アーレントの生活誌は、1982年にエリザベス・ヤング＝ブルーエルによる伝記が公刊されるまで、ほとんど知られていなかった。75年のアーレントの死に際して集まり、彼女への愛情に満ちた追悼の言葉を語った親しい友人たちですら、彼女の伝記的事実については断片的にしか知らなかったほどである。「愛情に溢れた理性的人間」と「冷徹で客観

的な」論述のあいだの不均衡をわたしたちはどのように考えるべきであろうか。

本論文は、こうしたヤング＝ブルーエルの仕事や、その後の書簡集や遺稿集の公刊を基盤にして成立している。しかし、本論のめざすところは「哲学的伝記」ではない。ヤング＝ブルーエルは「思考の場」には入り込めないと断じたが、本論文は、「政治的思考」に焦点をしぼることによって、アーレントの残した諸々のテキストが、その成立する「場」をあらわにするのではないかと期待する。

3. アーレントの同時代人のなかで彼女の「政治的思考」を最も的確に理解していたのは、おそらくカール・ヤスパースとハインリッヒ・ブリュッヒャーである。管見によれば、アーレントは、1940年代に培った「政治的思考」を晩年にいたるまで維持しつづけた。それは、「25年の歳月の思いを込めて」ブリュッヒャーに捧げられたもうひとつの書が、「政治的思考の試論」と名指された『過去と未来の間』（第一版は1961年）であったことからあきらかである。ただし、ここで重要なのは、ブリュッヒャーとアーレントの関係そのものではない。むしろ、両者がおそらく共有し、ヤスパースがそこに見てとったと規定できるものは何であったのかを、「政治的思考」への問いの焦点としなくてはならない。

アーレントは、『過去と未来の間』の序文において、「われわれの遺産は遺言ひとつなく残された」というルネ・シャールの言葉と、アレクシス・ド・トクヴィルの「過去がその光を未来に投げかけるのを止めたので、人びとの精神は暗がりのなかをさまよっている」という言葉を並べている。拠り所とすべき伝統や基準はない。アーレントにとって、このことは現代の思考の条件である。「現在では、思考とリアリティの分離がもたらす窮状を前もって承認しておくことすら、ありふれたものになっている」。

アーレントはこうした思考とリアリティの窮状を唯一正確に描いたものとして、フランツ・カフカの寓話『彼』を挙げたことがある。「彼」は、過去と未来というふたつの敵の狭間にいる。第一の敵は起源から「彼」を圧迫し、未来へと押し進めようとする。第二の敵は前に立ちふさがって「彼」を過去へと押し戻そうとする。「彼」は敵たちが油断している隙になんとか戦線から超越して「彼」自身が審判官となることを夢見ている。アーレントは、その寓話を、出来事が言葉にされる直前の精神の戦いとして解釈するのである。現代において、思考は出来事に結びつかず、現実との具体的な関連を一切失った「真理の焼き直し」になっている。こうしたあり方にたいしてアーレントは警告を発しつづけた。出来事は、もしもそれを把握する言葉がないのであれば、リアリティではなく、たんなる幻覚に

なってしまう。あるいは、人間の精神は過去と未来の間の裂け目で「力尽きて死ぬ」かもしれない。その時、人間はみずからの運命を「暗い宿命」に委ねてしまうような危機にさらされるのである。ユダヤ人としてナチズムを体験し、18年間の無国籍生活を送り、ユダヤ政治とガス室のあいだで思考しなければならなかった時、アーレントが何よりも必要としたものこそ、過去と未来の間でリアリティを獲得し、出来事を意味づけていく言葉だったのではないだろうか。

4. さて、以上のような問題関心に基づいて本論は四つの章から構成されている。

まず第一章「亡命知識人アーレント」では、ヨーロッパとその理性的思考の伝統が崩壊したという経験のなかで、亡命知識人アーレントがどこに真実を求め、リアリティを見いだそうとしたのかという問題を考察している。当時、「歴史家と政治記者のあいだのようなもの」として著述活動をおこなっていた彼女が、いかなる「語り方」を獲得していったのかについては、これまでほとんど注目されてこなかった。しかし、これこそは「政治的思考」が始まるきわめて重要な現場である。亡命知識人としてのアーレントのアウトサイダー性は、「ヨーロッパ的教養」と「ドイツ系ユダヤ女性の経験」に帰されることが多かった。本章はそうしたアーレント像へのひとつのアンチテーゼにもなっている。

ついで第二章「『政治』と《あいだ》」では、「全体主義」という出来事との格闘のなかから、アーレントが独自の政治概念を生み出していく過程を探ろうと試みている。「全体主義の起原」で表明された問題意識とアーレント思想の鍵概念である「現れ」とはどのような連関をもつのか、またアーレントはどの地点で、「政治は複数の人間の〈あいだ〉に成立する」と表明したのかを精査した。中心となるあらたな資料は、アーレントが1942年以後つけていた「思索日記」の手稿である。そこには、従来利用されてきたテキストにもまして、アーレントの「政治的なるもの」についての生誕の過程を見ることができる。

さらに第三章「アイヒマン論争と《はじまり》」では、「アイヒマン論争」の発端を40年代のアーレントのテキストに遡って見ていくことによって、もうひとつの「政治的思考」の「始まり」を位置づけた。ここではアーレントと知識人世界との関わりに眼差しを戻している。とりわけユダヤ神秘主義の権威であり、友人でもあったゲルショーム・ショーレムとの論争に焦点を置き、通常60年代の論争の局面に限定されがちな論点を、40年代の局面にまで引き移して考察した。

最後に第四章「『木の葉』の《身ぶり》」は、晩年のアーレントが語った自己表現の比喩に示唆を受けながら、アーレントが「世界」にたいしてとったある選択、強いていえば「身ぶり」とでも言うべきものを、あらためて際だたせようと試みた。一見、いかにも寓意的な、あるいはメタフォリカルな言語表現のなかに、アーレントのいかなる政治的思考が凝集されているのかを、テキストに則して解説した。

5. いずれの章においても、筆者がつねに念頭においている目的意識とは、アーレントの言葉のありか、政治的思考の現場を、いかに精密に、しかもその息づかいを見失うことなく跡づけることができるのかという課題である。そのために、アーレントの生前に公刊された著作と、書簡などの遺稿とを筆者は同等の重さをもつものとして扱った。アーレントのテキストは、どれも始まりと終わりをもった一貫したものなどではなく、さまざまな襞をもつ多面体であったり、断片であったりする。既存の学問的ハビトゥスからすれば、それらはいかにも文学的、寓意的であり、既存の政治学の概念装置からは遠い。しかし、まさにアーレントが自分の方法を「古風な物語り」と呼び、その切迫感を「手すりなき思考」と名づけたことに立ち戻るならば、本論文の選択がもつ緊張感も理解されるであろう。